

カリキュラム論の立場

お茶の水大學
助教

吉田昇



1

カリキュラム論は戦後、たちまち教育思潮の中心となり、人々の耳目を集めてしまつた。カリキュラムという言葉が、何となく明るい、斬新な響きをもつて、たよりなくさ迷つていた教育者をひきつけたのである、

もちろん、それは單なる言葉の響きだけではなかつた。カリキュラム論に展開されるような實際的問題は、これまでわが國の教育界を風靡し、且つ急速に過ぎ去つた多くの教育學説において、ほとんどとりあげられてはなかつたのである。ドイツに源流をもつ多くの教育學説は、觀念の分析や、理念の謳歌に力を盡し、方法や内容の問題は、卷末に附録的にとりあげられているにすぎない傾向をもつていた。しかもそこに嚴めしい言葉をもつて論じられている方法や内容は、

實際の授業の上で、どうやつてよいか見當のつかないようなものも少くなかつたのである。

これに反して、カリキュラム論は、ていねいに、實際の教育をどのように計畫すべきかを教えてくれる。三年の二學期にどのような單元を、どのように展開するかということが細々と書いてある。實際の教育にたずさわるものにとつて便利なことこの上なしである。

カリキュラム論が、戦後に流行した理由はこれだけではない。もつともつと重要な理由がある。それは、文部省によつて統制されていた教育内容が、學校と教師の責任に委ねられることになつたという事實である。

これまでは、國定教科書というものがあつて、それを教えることが義務とされていた。教育の内容について考えなければならぬのは、教科書局の官吏と、その依頼によつて、そ

の改訂に参畫した少數の學識經驗者だけで、あとの教育者は全くのあてがひ扶持で、教育内容について考える必要もなく、また、たとえ考えたところで、どうするわけにもゆかなかつたのである。

この體制は、戦後すつかり變つてしまつた。國定教科書は原則として廢止され、檢定制がこれに代つた。學校や教師は自分の責任において數多くの教科書から、最もよいと思われらるものを選ばなければならなくなつた。しかも、教科書を教えればそれでよいという考えは、具體的な經驗から外れたものとして痛烈に非難された。教科書は、具體的な教育活動の一つの補助として取り扱われねばならないのである。

このように考え方は、戦後の教科書不足という困つた特殊事情と結びついて、一層急速にひろがつて行つた。教科書がなければ、どうしても、自分で具體的な教育活動を考案しなければならぬ。そのときの、より所とされるのが、カリキュラム論なのである。

戦後のカリキュラム論はかくして極盛に達した。ヴァージニア・プランとか、サンタ・バーバラ・プランとかど紹介され、その懇切な紹介書はベスト・セラーズの一つとさえなつた。それに續いてわが國の種々の學校でも、具體的なプログラムの作製が行われ、何々プランと銘打つたものが、雨後の筍のごとく現われることとなつたのである。幼児教育の分野においても、カリキュラムの問題が、人々の口の上るようになつたのは、このような教育界全般の動きの結果ということ

ができる。

私は、こゝに幼児教育におけるカリキュラムを論じようというつもりは毛頭ない。幼児教育のカリキュラムについてはこの道の専門家が、數多く居られるので、その方々が論じられたことと思う。私は、たゞ、右のような事情のもとに普及したカリキュラムという言葉について、もう少し説明を加えて見たいと思うのである。それは、カリキュラムということについて、本當の理解がないと、幼児教育のカリキュラムを作製するに當つても、種々の矛盾を生ずると考えられるからである。

2

カリキュラムという言葉を用いる場合、先づ第一に注意すべきことは、カリキュラムの概念と、新しい教育内容乃至教育方法の概念は全く別であるということである。

カリキュラムという言葉の語源は、どの本にも書かれているように、ラテン語のクレレ (Curere) であつて、この言葉は走路を意味する。従つて、教育においては、生徒が入學から卒業までに經過する學習内容ということになる。

この言葉の使用は、かなり古くから始まつて居り、數十年前の教育學書にも出て来る。従つて、カリキュラムという言葉の意味するものは、必ずしも新らしい教育内容とは限らない。中世の僧院のカリキュラムとか、ドイツのギナムジウムにおける偏狭なカリキュラムとかいふ言葉使ひは、全く自然

な當り前のことである。教育内容は、古くても、新らしくても、カリキュラムと呼ばれて差支えないのである。

カリキュラムの概念が、その内容の近代的性格と別であることは、歐米の人々にとつては、全く説明を要しないことであるが、わが國の現状においては、特に注意を要することである。筆者の友人が、或る邊鄙な所の小學校を訪れたところ、その校長が得々として、

「うちの學校ではカリキュラムというものをやつていません」と述べたとのことであるが、この挿話は、わが國獨特の概念の矛盾を雄辯に物語つてゐる。

わが國で、カリキュラムというとき、必ず教科別から脱却した經驗カリキュラムだと考えられていることや、コア・カリキュラムが唯一無二のカリキュラムであると思われている狀況は、これまでカリキュラムについての論議が全く存在しなかつたところに、アメリカのブロードレシヴスの經驗カリキュラム論が、そのまゝ紹介されたという特殊な事情によるところが多いのである。

もつとも、カリキュラム論と、經驗カリキュラムの結びつきを、全く偶然のものと言うことはできない。經驗カリキュラムが、現代におけるカリキュラム論を盛んならしめた原因となつてゐるからである。

アメリカにおいても、カリキュラム論は現在その極點に達している。むかしも、カリキュラムについての論議がなかつたわけではない。アメリカには國定教科書はなかつたから、

教育内容をどうするかについて、多くの人々が考えていたのである。しかし、その場合、人々の考える一定の常識が、自ずから一つのワクをつくつていた。その常識というのは、三學年のときには、算數はどのくらいまでするか、九學年のときに、國語はどの程度の語彙を有しているかという見方である。

教科というものは動かし難いものだとする考え方は強く、學校は教科さえ教えればよいという傳統が搖ぎ難いものに見えたのである。このような體制の下にあつて、教育内容の論議は、部分的な修正の域を出なかつたのである。

しかし、二十世紀に入つて、經驗ということが強く主張されるようになると、教科という常識的なワクは大きな打撃を受けることになつた。學校は、文字を教えたり、算數を教えたりすることだけを使命とすべきではなく、もつと、廣い生徒の經驗をのびしてやらなければならぬ。算數や文字は、このような意味の深化の契機となるべきであるといふのである。

この新しい立場は、教科を中心とする従來のカリキュラムと對立した。對立は論争を生じカリキュラム改造のための著しい著書が現われたのである。わが國に紹介された多くのカリキュラム論は、この論争における進歩的な立場によるものであり、従來の教科カリキュラムを痛烈に批判し、新たな提案をしてゐるものである。

かくて、カリキュラムという言葉は必ずしも新らしい經驗

カリキュラムを意味しないけれども、経験カリキュラムの立場を無視しては、現代カリキュラムは意味をなさないとすることが明らかにされた。

3

それでは、カリキュラムを構成する場合、教科カリキュラムと経験カリキュラムの優劣は、どうなるのであろうか。われわれは、この問題を簡単に、どちらか一方にきめてしまふわけにはゆかない。というのは、この問題を考える場合に、考慮に入れなければならない要素が極めて多いからである。こゝでは、その中で、特に重要と思われる二つのことを述べて見よう。

第一に考えなければならないのは、被教育者の年齢の點である。

経験カリキュラムは、教育内容のまとめ方を「心理的」に構成するから、被教育者の學習に適して居り、教科カリキュラムは「論理的」に構成されているから、不適當であるといふのが、進歩派の主張である。しかし、よく考えて見ると論理というのも、やはり一つの心理に外ならない。もちろん、論理的な思考推移は、兒童が十分に具體的な事實を認識しない間は理解できないことも事實であり、それ故また、これは知的な探究の結果を伝えるのに便利であり、知的な探究それ自身の過程とも異つてゐることは認められなければならない。

だが、これらのことを認めることは、論理的なものゝ考えを輕視する理由にはならない。人類は論理的な思考によつて文明の進歩を生じて來たのである。従つて、兒童は、直接經驗によつて、種々の現象を學びとる機會を與えられると共にやがて、その経験を論理的に把握することも學ばねばならずまた、そのために從來の文化遺産の論理的な構造を學びとることも必要となつて來る。

このように考えるならば、心理と論理の對立は、必しも二者擇一のものではないということになる。教育を行う場合、この兩者が満足するような方法がとられなければならない。兩者を満足させるといつても、そこに年齢による段階が考えられる。低學年においては、事實の經驗的把握が重點的に教育され、中學校や、高等學校になると、次第に論理的なものが重要になつて來る。

かくて、ユニット・プランやコア・カリキュラムの優劣という場合、被教育者の年齢が重要な役割を果すことになるのである。小學校において、直接經驗を中心とした教育内容の構成が勝つてゐることは、多くの理論や研究の支持するところであるし、大學において論理的な構成による學科の學習が主となることは當然とされている。問題は、この中間にある中等教育である。中等教育の分野こそ、目下、二つの立場が相争つてゐる間いのである。カリキュラムについての論議も、中等教育に關するものが最も多くなつてゐるのは、これらの事情の必然的結果である。われわれは、カリキュラム

ということを考える場合に、これらの年齢的な段階ということとを十分に頭に入れて置かなければならないのである。

第二にカリキュラムを考える場合、被教育者の年齢に劣らず重要なことは、これを實施する教育者や教育施設の問題である。

經驗カリキュラムが、適しているかどうかは單に被教育者の年齢によつて定められるだけではなく、教育者や教育施設によつても異つて来る。經驗カリキュラムが、すぐれた教員とすぐれた教育施設をもつたアメリカの中等段階における實驗學校で成功したとしても、それが直ちに、わが國のあらゆる中學校で成功するとは限らない。その最も大規模な例は、ソヴィエツトの教育である。

ソヴィエツトでは、一九二〇年代に、コムプレックス・メソッドという學科別によらない綜合教育のやり方を全面的に採用した。シベリヤのはてでも、黒海のほとりでも、コムプレックス・メソッドが行われることとなつた。しかし、この結果生じたものは、救い難い學力不足であつた。教室は、無秩序と混亂が支配し、上級學校への入學者の學力低下は、五ヶ年計畫の遂行にも支障を來すのではないかと懼れられるに至つた。この結果、コムプレックス・メソッドは教年にして廢止され、再び學科別のカリキュラムがこれに代ることになつた。

このように、カリキュラムが再び學科別になつたとしてもそれは、經驗を無視して、昔の書籍暗誦の授業に歸ることを

意味しはしない。經驗を重視はするが、その學科課程のため方は、論理的な教科を骨組みとし、その中に實際的な經驗を組み入れることにしたのである。

われわれは、こゝでも、經驗と學科の極端な二者擇一が必しも望ましい結論とは言ひ得ないことを知る。カリキュラムを構成するのに學科をワクとして組むか、經驗單元をワクとするかは、これを用いる教員や施設によつて、變更されるべき事である。そして、そのいづれをとつても、經驗と學科の兩者が、とり入れられなければならない。カリキュラムは、言わば、教育をする場合の道具なのであるから、教育者が、それを十分に使いこなせないような形にしてはならないのである。

4

以上、われわれは、カリキュラムについての論争が、經驗カリキュラムと教科カリキュラムの對立を中心にして發展して來たこと、更に、その長短は、單にカリキュラム自身の側からのみ考察するべきではなく、それに用いる教員及施設やその下に教育される被教育者のことも考え併せて、判斷されなければならないことを述べて來た。

これらの概観は、現在種々論議されている小學校や中等學校のカリキュラム論を理解する上に、多少の便宜を與えるかも知れない。しかし、最も直接的な幼児教育の問題については、どうなるのであろうか。私は、やはり、これらのカリキ

キュラム問題全般についての理解が、幼児教育のカリキュラムを考へる場合にも、いくらかの示唆を興え得ると思ふものである。この示唆としては次のようなものが擧げられるのである。

第一に、幼児教育においては、一般的な意味におけるカリキュラム論争というものは存在しないということが確認されなければならぬ。

経験カリキュラムと教科カリキュラムの對立の中心は中等學校である。幼児教育の分野では、學科別というようなことは、昔から存在しなかつたのである。幼児教育のカリキュラムとしては、のびやかで、ゆたかな経験を、どのように興えてゆくかということが、昔から現在まで共通した問題なのである。カリキュラムといつても、何も根本的な變化が起るのではないといふことは、よく理解して置かなければならないのである。

第二に、幼児教育のカリキュラムといふことは、特に新たな問題ではないとしても、常に重要な問題であることは事實である。

カリキュラムという言葉が既に述べたように古くから教育内容を意味しているとすれば、幼児教育の内容についてもその不斷の進歩が計られなければならないことは當然である。この點について、最近のカリキュラム論は、種々の有效な實例を示している。

小學校や中學校のカリキュラムが、經驗を中心として構成

されるようになると、これまで無縁のものとなつて来た幼児教育のカリキュラムと、極めて相近い型となつて来る。そのため、小學校や中學校のカリキュラム構成の原理として採用される條件が、幼児教育の分野でも、考慮され得るものとなつて来る。例えば、スコープ（カリキュラムをつくる場合のひろがり）とシークエンス（教育内容の時間的順列）のワグ等はそれである。幼児教育のカリキュラムが、このような圖式を採用することによつて、心理的な發達段階や、社會的な機能が、より一層有效なものとして、幼児教育の分野に入つて来ることは、考へ得られることである。

そればかりでなく、アメリカのカリキュラム論争における實證的な態度は、幼児教育の分野にも、着實な觀點を興えるのではないかと思はれる。即ち、アメリカにおける經驗カリキュラムの發展は、客觀的な學業テストや社會性のテストに裏づけられて来た。小學校教育を對象とするニューヨークの六年研究や、中等教育における有名な八年研究は、この詳細な報告である。

幼児教育のカリキュラムが進歩したものとなるためには、單に圖表ばかりを巧みにつくりあげることではなく、このような客觀的な評價によつて、實際の効果を測定することが必要になつて来るのである。

このような理解と態度をもつて、幼児教育のカリキュラム改造に臨むならばすぐれた進歩が可能になると豫測される。これに反してカリキュラム改造の流行に雷同して、(二五頁へ)

「併し何と澤山の（多くの頁）紙になつたことでせう」と叔父が言つた。「これはどうにか手紙になるね」と彼は冗談を付け加えた。

「ああそうです」とリナは懇願するように母の方に向いた。

「若し私が——お母さん、あなたやお父さんのようにこんなに小さくそしてこんな文字で書くことが出来さえすればどんなにかいいでしょう。あなたの書いてらつしやる時はたいへん早くそして私のようにこんな澤山の紙を使わなくても済むんですもの。お願い、お母さんそれを屹度教えて頂戴——お願いです！」

「はいはい、リナ、出来ませうよ。ただそのためには、私達はお父さんの留守中の今の暇の時間よりも、もつと多くの時間を用いなければならぬのよ。リナはそれを小學校でもつとよく學ぶでしょう。私達が待ち望んでるお父さんが間もなく歸つてらつしやるでしょうから、その時リナはその學校にはいれるでしよう。それまでリナはこのようにしてただ安心して待つてなければなりません。それまでは愛するご本の讀み方で、時間を面白く過ごすことが出来るでしよう」

「ああそうです。そしてそれからお母さんのように書きましようね」

（七頁より）

形だけの整備をはかり、教育内容という言葉ばかりキキラムと呼びかえることによつて、改造が出来上つたと考へるならば、大きな誤謬の原因となるであらう。教育上のどんな進歩

でも、それが可能になるためには、多くの努力を必要とすとす、教育の改造に關して、手軽に他の形を模倣することは嚴つしまなければならぬ。

（三四頁より）

（5） 五歳兒の發達的特質

五歳兒は幼兒期の終りに近い所に在る。たのもし、たよりになる、獨立的な能力と性格とが幼兒の心のうちに育つて在る。この成長を順調につづけさせて行くように考へることが、わたくし遠大人のつとめである。

新刊紹介

厚生省兒童局保育課 副島ハマ 氏著

（幼兒の集團遊び歌曲集）

こどもの楽しい歌遊び

「地方の講習會で、若い熱心な保母さん方に「……ぜひ集團遊びの樂譜を……」と云われ、自分が保育に踏み出した頃の苦勞を想ひ合せて、すすめられるままに、古くから幼稚園、保育所で用いられているものを二十曲だけまとめて見ました。保育界の拾石になりたい私の若い保母さん方へ贈る小さな贈物の一つです」

これは同著のはしがきの一節であるが、保育者ちがいと仇名される副島氏の、保母を愛する真心は、この書出でて、増々多くの保母を喜ばせることだらう。 定價一〇〇圓

（目黒區下目黒二ノ四六八・白眉社發行）